

## Poems (1919) における T. S. エリオットの比較の描写

T. S. Eliot's Comparative Descriptions in *Poems* (1919)

古 賀 元 章

Motoaki KOGA

英語教育講座

(平成23年9月30日受理)

### はじめに

1917年に, T. S. Eliot (1888-1965) の第一詩集 *Prufrock and Other Observations* が出版された。3年後に, 第三詩集 (イギリス版では *Ara Vos Prec*, アメリカ版では *Poems*) が公表された。国内外の批評家たちは, 第一詩集の研究から第三詩集の研究へと目を向けがちである。しかしながら, 1919年に第二詩集 *Poems* (7編)<sup>1</sup> が刊行されたことは, 軽視されているように思われる。

こうした現状を考慮して, 本稿は, この第二詩集に焦点を当てて, そこに見られる比較の描写という詩集の特徴を探っていきたい。この特徴は, 第一詩集には見られないので, 詩人としてのエリオットの成長を知る上で注目すべきものであると言えよう。

この目的のために, 本稿では第二詩集から取り上げた4編の詩の描写を検討したい。その際に, これら4編の詩について掲載順に論述する。

### 1

第二詩集の冒頭に収められている “Sweeney Among the Nightingales” (1918) から考察してみることにする。まず, この詩の次のようなエピソードを Southam (121) の英訳で引用する。

Alas, I am struck deep with a mortal blow.

これは, 古代ギリシャの悲劇詩人 Aeschylus (525-456 B.C.) の *Agamemnon* からの言及で, トロイア戦争を終えてアルゴスに帰還したアガ멤ノン (Agamemnon) 王が湯殿で不倫の妻クリュタイムネトラ (Clytemnestra) に致命傷を負わされたときに述べる場面である。

では, エリオットの “Sweeney Among the Nightingales” にはギリシャ神話からうかがわれる人間の死のイメージがどのように適用されているのであろうか。この点について考えてみたい。彼の詩の冒頭は次の通りである。

Apeneck Sweeney spreads his knees  
Letting his arms hang down to laugh,  
The zebra stripes along his jaw  
Swelling to maculate giraffe. (56)<sup>2</sup>

ここに登場する人物はエイブネック・スウィーニーである。エイブネックは猿の頸を意味する。そこで、類人猿のようなスウィーニーは、膝をひろげ、両腕をたらし、大口をあげて笑う。その際に、頸にそった彼のシマウマ模様が腫れて斑点の模様となる。

まず書き出しで、スウィーニーの動物性が視覚的に示される。次に、荒れ模様の空に浮かぶ月の暈が西の方角のプレート河（南米のウルグアイとアルゼンチンの間にある）に向かう。これは嵐の到来の前兆である。このような光景から推察して、場所はウルグアイの首都モンテビデオ（Montevideo）であると思われる（Southam 122）。

その後、次のような場面がある。

The person in the Spanish cape  
Tries to sit on Sweeney's knees

Slips and pulls the table cloth  
Overturms a coffee-cup,  
Reorganised upon the floor  
She yawns and draws a stocking up; (56)

“The person in the Spanish cape” は、スウィーニーがいる酒場の娼婦である。女は、誘惑しようとして彼の膝に座ろうとするが、足を滑らして失敗してしまう。この誘惑の失敗の様子から、彼女は傍観者を思わず笑わせることを目的とするような卑俗な人間である。

“The silent man in mocha brown” (56) が、二人の場面を目撃する。彼は窓の敷居に這いつくばり、大口をぼかんと開けている始末である。この動作も、彼が卑俗な人間であることを印象づける。

さらに、次のような場面が示される。

The silent vertebrate in brown  
Contracts and concentrates, withdraws;  
Rachel *née* Rabinovitch  
Tears at the grapes with murderous paws;

She and the lady in the cape  
Are suspect, thought to be in league;  
Therefore the man with heavy eyes  
Declines the gambit, shows fatigue, (56-57)

チョコレート色の上衣を着て黙っていた男が “The silent vertebrate in brown” として表現され、下等動物のような容態である。役割が終わったと思って、彼はこの場所から退散する。代わって登場するのがレイチェル（旧姓ラビノヴィッチ）という名前の女である。彼女は、ウエーターが運んできた果物の中から葡萄を殺意のある爪先でもぎ取る。動物的な卑俗の彼女が、スペイン風のケープ姿をした娼婦と共謀して、自分を殺害しようと話し合っているのではないかとスウィーニーは予感する。しかし、彼はどうしたらいいのか判断できずに、疲れを感じてしまう。

とにかくスウィーニーは酒場を出るが、酒場にいる人物たちが気になって窓の外から中を覗き込む。そうすると、酒場の主人が少し離れた戸口で、誰ともわからない男と話している。その後すぐに、“The nightingales are singing near / The Convent of the Sacred Heart” (57) が描写される。この描写は、先ほど現れた女たち（娼婦、レイチェル）がナイチンゲールとなって、キリスト教会の尼僧修道院の近くで歌っていることを伝えている。この鳥は、ローマの詩人 Ovid (43B.C. - ?A.D. 17) の *Metamorphoses* において、フィロメラ (Philomel) がトラキアの国王テレウス (Tereus) から陵辱を受けた後、ナイチンゲールに化身したギリシャ神話を思い起こさせる（『転身物語』巻6 208-19を参照）。そうすると、エリオットの詩の女たちは一種のコーラスとなって、スウィーニーの死を皮肉にも弔っていることを暗示するのである。

引き続き、この詩は次のような場面で終わっている。

And sang within the bloody wood  
 When Agamemnon cried aloud  
 And let their liquid siftings fall  
 To stain the stiff dishonoured shroud. (57)

最初の2行は、クリュタイムネトラによるスウィーニーの暗殺を連想させる。その連想に注意を払うと、残りの2行は、彼の殺害がアガメムノンの殺害ほど深刻な話ではないことをことさら強調しているかのようである。その強調がかえって、最初の2行の出来事を浮き彫りにさせる結果となっている。

このように、卑俗な動物のようなスウィーニーの殺害と、その下敷きとなるギリシャ神話におけるアガメムノンの殺害が示されている。ここで、両者を描くエリオットの姿勢を探究してみたい。

ハーバード大学に入学する前の1905年に、エリオットは“The Man Who Was King”という作品を書いている。その作品の内容は、フランス人から日曜日に衣服を着て教会へ行くように教育を受けたために、文明化された土着民が退屈したということである (Jain 21)。これは、文明化が皮肉にも、人々の生活を退廃させたということを指摘している。1922年の“London Letter”の中でエリオットが危惧するのは、これまでのさまざまな生活手段（劇場、楽器、馬、子供の就寝時のおとぎ話）が、文明社会の生活手段（映画館、蓄音機、自動車、拡声器）に取って代わられると、未開のメラネシア人のように人間社会が墮落するということである (662-63)。同じ評論の別の箇所でも、下層階級の人々がなぜ生きがいのない生活を送るのかが述べられている。その原因は、彼らが伝統あるミュージックホールを大事にしないで急増する映画館に頻繁に足を運ぶからである。そこには、何事も受け入れるだけの単細胞的な人間になってしまうというエリオットの憂いがある (662)。メラネシア人を引き合いに出した文明社会の墮落論は、1905年の作品の内容を展開させている (Jain 21)。そのことが、エリオットの単細胞的な人間観にも当てはまるのである。これらの考え方は、詩人が現代人と未開人の両方を意識すべきであるという彼の見解 (“Tar” 106) に基づいている。

こうした一連のエリオットの論考が、“Sweeney Among the Nightingales”に登場するスウィーニーのような動物性の人物造形に反映されている。彼の死は、退廃的な人間社会を象徴すると言えよう。

哲学を勉強するために、1914年にエリオットは母校から在外研究奨学金をもらい、イギリスのオックスフォード大学で古代ギリシャの哲学者 Aristotle (384–322 B.C.)、イギリスの観念論哲学者 F. H. Bradley (1846–1924) を研究する。ところが、第一次世界大戦の重苦しい雰囲気のために、彼が悩んでいたのは、①イギリスに住むべきか、アメリカに帰るべきか、②このまま哲学を勉強すべきか、文筆活動をすべきか、③母国で大学教師を希望する両親に従うべきか、自由意志を尊重すべきか、である。そのとき、エリオットは、大学時代の友人 Conrad Aiken (1889–1973) の尽力によって、当地で文学の改革運動を推進していたアメリカ人の詩人 Ezra Pound (1885–1972) と会う。彼の影響を受けて、エリオットは文学の仕事することに決める (“To J. H. Woods,” 10 July 1915, *The Letters of T. S. Eliot* 117)。

学生時代のエリオットは、所有するドイツの哲学者 G. W. F. Hegel (1770–1831) の *Lectures on the Philosophy of History* にある余白の頁に、われわれと過去との関係、現在以外についての論考（の可能性）、を問うて、過去の現存を肯定する (Jain 146)。パウンドはこうした彼の考えを後押しする役割を果たしている。その役割を裏付けるのが、彼の詩の歴史的方法について述べる当時のエリオットの次のような見解である。

As the present is no more than the present existence, the present significance, of the entire past, Mr. Pound proceeds by acquiring the entire past; and when the entire past is acquired, the constituents fall into place and the present is revealed. (“The Method of Mr. Pound” 1065)

エリオットが目指すのは、過去の現存による現在の提示である。彼は、過去と現在の密接なかわりを強調したパウンドの手法を自分の詩に取り入れている。彼は“Sweeney Among the Nightingales”の中で、ギリシャ神話の殺害の現代版を描くことによって、過去と現在の共通点を示している。その共通点は、過去の醜い人間の行為が形を変えて現在に繰り返されていることである。過去と現在を比較した描写は、パウン

ドの歴史的意識を参考にした結果の表れであると言える。

## 2

“The Hippopotamus” (1917) では、丸い胴体で短い四足の河馬が紹介されている。この動物は、背中が堂々として泥の中で腹ばいになって休んでいるが、血と肉だけで生きているような動物にすぎないので神経の衝撃に耐えられない。この動物はまた、足下がおぼつかないのに、獲物を求めるとき、よろめいてしまう。他方、“the True Church” (49) は、足下（資金源）がしっかりしていて、居ながら配当が自ずと集まってくる。このように、卑俗な河童と聖なる教会が比較されている。

この詩は、こうした比較が基軸となって展開されている。その展開を理解するために、次のような場面を引用してみたい。

The hippopotamus's day  
Is passed in sleep; at night he hunts;  
God works in a mysterious way —  
The Church can sleep and feed at once. (49)

引用文の前半では、昼に水中で寝て、夜に陸で草を食べる河馬の夜行性が描かれている。教会は、元来、宗教の教義を信者たちに説いたり、彼らが礼拝したりする厳かな建物である。したがって教会は、配当がおのずから集まるので、河馬のように努力しないですむという。引用文の後半では、教会を介して、キリスト教の形骸化が皮肉を込めた表現で揶揄されている。

この詩の終わりでは、こうした揶揄が次のように締めくくられている。

He shall be washed as white as snow,  
By all the martyr'd virgins kist,  
While the True Church remains below  
Wrapt in the old miasmal mist. (50)

場面の前半は、本能のままに素直に生きた河馬が昇天したとき、天国で霊的に祝福されることを伝えている。場面の後半は、真実の教会が地上で、河馬とは対照的に、相も変わらず自らの利益だけを求めていることを諷刺している。

“Mr. Eliot's Sunday Morning Service” (1918) では、次のような詩行を見てみよう。

The sable presbyters approach  
The avenue of penitence;  
The young are red and pustular  
Clutching piaculative pence. (54)

黒衣の長老たちが若者の改悛者たちの列に近づく。改悛者たちは、贖罪の小銭を用意している。彼らは、罪を赦免してもらうために教会に集まっているのである。

その教会が次のように描かれている。

Under the penitential gates  
Sustained by staring Seraphim  
Where the souls of the devout  
Burn invisible and dim. (54)

教会の壁に「煉獄の門」の絵がある。この絵は、死者の魂が天国に入る前に煉獄で罪を浄められる光景であ

る。じっと見つめる熾天使（天使の9階級の中で最高位）に支えられた悔い改めの門の下で、生前に信仰の厚かった者たちの魂の浄罪が行われる。ところが、この絵に描かれた魂の姿は集まった改悛者たちには目に見えずほんやりとしている。この姿は、形骸化した贖罪を行う教会を暗に批判していると言える。

ここでもスウィーニーが登場し、この詩の最後の4行で次のように紹介される。

Sweeney shifts from ham to ham  
Stirring the water in his bath.  
The masters of the subtle schools  
Are controversial, polymath. (55)

上の詩行の前半は、彼が入浴し、お尻を移動してお風呂の湯をかきまわす場面である。同じ詩行の後半は、彼の入浴シーンを引き合いに出して、博識家としての神学者たちが、古来、神学上のさまざまな論争をしてきたことを伝える場面である。この引き合いは、彼が宗教に無関心な俗物である一方で、神学者たちが知識をひけらかして不毛な論争をしたり、物欲の誘惑に明け暮れたりする現実を示唆している。それは、この詩が墮落した人間社会と人間救済を忘れた教会を共に批判していることを意味するのである。

“The Hippopotamus”では河馬と揶揄される真実の教会が併置され、“Mr. Eliot’s Sunday Morning Service”ではスウィーニーと形骸化した教会が併置されている。ここで、このような比較の描写を考えてみたい。

“Sweeney Among the Nightingales”に登場した動物性スウィーニーは、墮落した人間の姿を象徴していた。上述の二つの詩に登場した河馬とスウィーニーも、共に動物性を前面に出した性格の持ち主なので、同じく人間の内面の醜い様相の象徴として示されていると言える。

上述の二つの詩に見られる教会の描写について考察してみよう。その際に注意を払わなければならないのが、当時のエリオットのキリスト教観である。<sup>3</sup> エリオット家が信奉していたのは、著名な宗教者の祖父 William Greenleaf Eliot (1811–1887) の影響下にあったキリスト教のユニテリアン派<sup>4</sup>である。両親は息子に、この宗派の教えに基づいて厳しいしつけをしている。懐疑主義的な性格 (“To J. H. Woods,” 28 Jan. 1915, *Letters* 91) のエリオットは、厳格な家庭環境の重圧を感じて (Powel 4)、この宗派を素直に受け入れることができずに成長する (“[A review of] *Son of Woman: The Story of D. H. Lawrence*. By Middleton Murry” 771)。大学に入学後、彼がとった行動は、1910–11年のパリ遊学、1914年8月以降のイギリス定住と哲学の放棄、1915年の結婚である。これらの行動は、両親の意に反するものである。そのことを十分わかっていたので、エリオットは彼らに対して罪意識を抱くのである (“To His Mother,” 24 Oct. 1917, *Letters* 227)。

エリオットが罪意識のあり方を考える際に大きな影響を受けたのが、イギリスの哲学者・批評家 T. E. Hulme (1883–1917) である。1916年10月3日–12月12日に、エリオットは同国のヨーク州イルクリー (Ilkley) で現代フランス文学について6回の講義をしている。第2回目の講義では、彼は原罪と厳しい情緒訓練の必要性を説いている。この主張は、ヒュームの同じような信念<sup>5</sup>を踏襲している。この必要性に基づき、1916年に彼は、イギリスの哲学者 Hastings Rashdall (1858–1924) の *Conscience and Christ* を取り上げて、次のように評価している。

For Canon Rashdall the following of Christ is “*made easier*” by thinking him “as the being in whom that union of God and man after which all ethical religion aspires is most fully accomplished.” Certain saints found the following of Christ very hard, but modern methods have facilitated everything. Yet I am not sure, after reading modern theology, that the pale Calixean has conquered. ([A review of] *Conscience and Christ: Six Lectures on Christian Ethics*. By Hastings Rasgdall” 112)

キリストの教えを信奉することは、彼を神と人間の合一が最も十分に成し遂げられた際の存在と考えることで簡単に行われ、こうした現在の方法は何事も容易にするという。そうすると、信仰の基準が有効さだけとなる (Childs 60)。しかし、エリオットは実用的な神学に否定的である。彼の否定的な考えには、ヒュームの信念（原罪説、厳しい情緒訓練）に共鳴した姿勢がうかがわれる。こうしたエリオットの姿勢が、“The

Hippopotamus”や“Mr. Eliot’s Sunday Morning Service”における教会の批判へと向けられているのである。

## 3

“Whisper of Immortality” (1918) の前半は、イギリスにおける形而上派の作風の二人の人物—劇作家 John Webster (1580?-?1625) と詩人 John Donne (1572-1631)—について言及している。彼らが次のように記されている。

Webster was much possessed by death  
And saw the skull beneath the skin;  
And breastless creatures under ground  
Leaned backward with a lipless grin. (52)

Donne, I suppose, was such another  
Who found no substitute for sense,  
To seize and clutch and penetrate;  
Expert beyond experience, (52)

最初の詩行はウェブスターの死観を示唆している。“the skull beneath the skin”は、生きた女から、性的魅力ではなく精神的死の様相を感じさせることを伝えている。“breastless creatures under ground / Leaned backward with a lipless grin”は、死んだ女の姿に性的に魅了されることをにやにや笑いという誘惑の表現で伝えている。したがって、ウェブスターが取りつかれる死には、女性への嫌悪と魅力が相半ばするという意味が含まれる。そこには、人間の死についての思想を感覚的に把握することが求められているであろう。

二番目の詩行は、ダンもウェブスターと同じように、思想を感覚的にとらえる詩人として示されている。出来事が単なる経験を超えて、感覚的にとらえられるのである。そのことは、男性が女性と恋愛する性的イメージを連想させる“seize and clutch and penetrate”に暗示されているように思われる。

“Whisper of Immortality”の脱稿から3年後、エリオットは“The Metaphysical Poets”の中で、形而上派詩人たち、たとえばダンが、さまざまな経験を直接にとらえる感受性を有していたと論じている(287)。形而上派詩人たちについてのこのようなエリオットの考え方が、彼の詩におけるウェブスターやダンの記述に反映されているのである。

エリオットの詩の後半では、グリシュキン (Griskin) という名前の世俗的なロシア女が登場する。この女が最後の詩行で次のように書かれている。

And even the Abstract Entities  
Circumambulate her charm;  
But our lot crawls between dry ribs  
To keep our metaphysics warm. (53)

女は、ブラジル産の雌豹にたとえられ、強烈な匂いで相手を盲目にさせる。形而上派詩人たちのように難しい抽象的実体を感じ覚的にとらえる題材が彼女の魅惑に潜んでいる。そのために、彼らは魅力的な女性も、詩の格好の題材となるのである。その一方で、一般の人間はそうした題材の対象となる可能性があるとはいえ、肉欲に駆られて精神的な死の様相の相手に赴くのである。

このように、ウェブスターやダンのような形而上派の作風と、相手を魅了するグリシュキンの魅力が比較されている。この比較には、認識者と対象が直接に結びつくという共通点がある。その共通点は、エリオットが心酔していたブラッドリーの哲学概念「直接経験」(主客合一)<sup>6</sup>を土台としていることである。その頃の彼は、この哲学概念を評論や文学批評用語の根本原理として適用していたので、<sup>7</sup>その適用が“Whisper of Immortality”にも反映されているのである。

## 4

これまで考察した4編の詩は、総じて、比較という形で描かれていた。それは、ギリシャ神話と卑俗な男、教会と世俗的な人間、形而上派の作風と卑俗な女の魅力という比較であった。それぞれの比較の描写には共通点が見られた。こうした手法は、エリオットが学生時代に興味を示していた古代ギリシャの哲学者 Heraclitus (544 or 538 – 484 or 475 B.C.) の影響が認められるように思われる。この点について検討してみたい。

子供時代のエリオットは、*Fireside* という未発表の私的な雑誌を発行している。この雑誌では、Miss End と Mr. Front が婚約するという表現があり (Soldo 15), Mr Up と Miss Down の駆け落ちの表現もある (Crawford 1)。当時は、アメリカの開拓が西部へと広がる基点がセントルイスからシカゴへとすでに移っていたとはいえ (徳永 14), その名残が前者の都市にまだあったと思われる。少年エリオットは、住んでいた所が都市の終着駅であると同時に辺境地への出発点でもあったことを実感したであろう。

大学生院生のエリオットは、1913年春に開講されたエール大学からの客員教授であった観念論哲学者 Charles M. Bakewell (1867–1957) の “Kantian Philosophy” を受講した。この受講のために彼が用意した未発表の原稿 *Three Essays on Kant* は、ベイクウエルの *Source Book in Ancient Philosophy* を参考にして書かれた (Cuddy 97)。この著書ではヘラクレイトスの断片的文章に印が付けられた。その一つは、“In the circumference of a circle beginning and end coincide” (Bakewell 34; Cuddy 97, 99n) であった。彼は、子供心に言い抱いていた相反する事柄の表裏一体の考えの要約を、こうしたヘラクレイトスの哲学的思考の文章に見出したと言えよう。

同じ頃、エリオットはイギリスからの客員教授であった哲学者・数学者 Bertrand Russell (1872–1970) が1914年秋に開講の倫理学の授業に出席した。ラッセルと談話したとき、彼は “I was praising Heraclitus...” (Russell 212) と述べた。この発言は、上述したように、彼のヘラクレイトスの哲学への関心を物語っている。こうした彼の関心が、第二詩集における比較の表現の共通点が描かれる際に盛り込まれたと判断できよう。

## おわりに

これまでの論及から、本稿で扱った4編は、表現の違いこそあれ、相反する内容の比較を描いている。それぞれの内容は、エリオットが現実社会の醜悪な内面の様相を人間の歴史的過去にまでさかのぼって、広い視野で鋭く批判する対象となっている。このような姿勢は、第一詩集には認められないので、彼の詩人としての成長の原動力となっている。このような姿勢はまた、第二詩集では、さらに人間の歴史的過去にまで深く及んでいる。

エリオットは、1911–14年の時期を詩作のブランクであったと述べている (“Ezra Pound” 327)。それ以後に書かれた詩を取めた第二詩集の特徴と見なされる比較の描写は、エリオットが詩人として再出発するきっかけとなった手法であると指摘できよう。

## 注

1. *Poems* (1919) に記載されている詩及びその記載順については Gallup 24-25 を参照。
2. *Poems* (1919) からの引用はすべて *The Complete Poems and Poetry of T. S. Eliot* による。括弧内の数字はこの作品全集の頁を表す。
3. この点については、拙稿「*Prufrock and Other Observations* における語り手たちの視点」の記述内容と重複していることをお断りしたい。
4. この派については次のような解説を参照。

“It [Unitarianism] is essentially drained of its theology, since it denies the central tenets of predestination and damnation; heaven and hell are of less account than the mundane space which we inhabit between them. The measure of Man is Man himself and a peculiarly American optimism,

about the progress and perfectibility of humankind, is thereby given a quasi-spiritual sanction.”  
(Ackroyd 17)

5. この信念については、彼の“Translator’s Preface to Georges Sorel’s Reflections on Violence”を参照。
6. この哲学概念の簡潔な解説については、輪島 12-18 を参照。
7. この点については、拙稿「T. S. エリオットの文学用語の根本原理—「客観的相関者」, 「非個人的詩論」, 「感受性の分離」の場合—」を参照。

### 引用文献

- Ackroyd, Peter. *T. S. Eliot: A Life*. New York: Simon and Schuster, 1984.
- Bakewell, Charles M. *Source Book in Ancient Philosophy*. New York: Charles Scribner’s Sons, 1907.
- Childs, Donald J. *T. S. Eliot: Mystic, Son, and Lover*. London: Athlone P, 1997.
- Crawford, Robert. *The Savage and the City in the Work of T. S. Eliot*. 1987. Oxford: Clarendon P, 1988.
- Cuddy, Lois A. “Circles of Progress in T. S. Eliot’s Poetry: *Ash-Wednesday* as a Model.” *T. S. Eliot, A Voice Descanting: Centenary Essays*. Ed. Shyamal Bagchee. London: Macmillan, 1990. 68-99.
- Eliot, T. S. *Fireside*. 1899. The T. S. Eliot Collection, Houghton Library, Harvard.
- “The Man Who Was King.” *Smith Academy Record* 8.6 (June 1905) : 1-3.
- . *Three Essays on Kant*. 1913. The John Davy Hayward Bequest of T. S. Eliot’s Library Manuscripts, King’s College Library, Cambridge.
- . “[A review of ] *Conscience and Christ: Six Lectures on Christian Ethics*. By Hastings Rashdall.” *Internationa Journal of Ethics* 27.1 (Oct. 1916) : 111-12.
- . “Tar.” *Egoist* 5.8 (1918) : 105-06.
- . “The Method of Mr. Pound.” *Athenæum* 4669 (24 Oct. 1919) : 1065-66.
- . “The Metaphysical Poets.” 1921. *Selected Essays*. 1932. London: Faber and Faber, 1951. 281-91.
- . “London Letter.” *Dial* 73.6 (Dec. 1922) : 659-63.
- . “[A review of ] *Son of Women: The Story of D. H. Lawrence*. By John Middleton Murry.” *Criterion* 10.41 (July 1931) : 768-74.
- . “Ezra Pound.” *Poetry* 68.6 (1946) : 326-338.
- . *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*. London: Faber and Faber, 1969.
- . *The Letters of T. S. Eliot, Vol. 1: 1898-1922*. 1988. Ed. Valerie Eliot and Hugh Haughton. London: Faber and Faber, 2009. 2 vols. 2009.
- Gallup, Donald. *T. S. Eliot: A Bibliography*. London: Faber and Faber, 1969.
- Hegel, G. W. F. *Lectures on the Philosophy of History*. Trans. J. Sibree. London: George Bell, 1881.
- Hulme, T. E. “Translator’s Preface to Georges Sorel’s Reflections on Violence.” *New Age* 17.14 (14 Oct. 1915) : 569-70.
- Jain, Manju. *T. S. Eliot and American Philosophy: The Harvard Years*. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
- Powel, Harford Willing Hare, Jr. “Notes on the Life of T. S. Eliot, 1888-1910.” Unpublished dissertation Brown U, 1954.
- Russell, Bertrand. *The Autobiography of Bertrand Russell, 1872-1914*. Vol. 1. 1967. London: George Allen and Unwin, 1978. 3 vols. 1967-69.
- Sold, John J. *The Tempering of T. S. Eliot*. Ann, Michigan: UMI Research P, 1983.
- Southam, B. S. *A Student’s Guide to Selected Poems of T. S. Eliot*. 1968. London: Faber and Faber, 1994.
- オウイデイウス. 『転身物語』. 1966. 田中秀史・前田敬作訳. 京都: 人文書院, 1975.
- 古賀元章. 「T. S. エリオットの文学用語の根本原理—「客観的相関者」, 「非個人的詩論」, 「感受性の分離」の場合—」『言語文化学会論集』8 (1997) : 43-57.
- . 「*Prufrock and Other Observations* における語り手たちの視点」『福岡教育大学紀要』61 (2012) : 17-28.
- 徳永暢三. 『T. S. エリオット』(人と思想 102). 東京: 清水書院, 1992. 全188冊. 1966-2009.



輪島士郎. 『T. S. エリオットの詩と真実』. 金沢 : 高島出版, 1988.